

津田昇平教話 第七六話

令和三年三月十七日 朝の教話

月も雲に隠れることがある。隠れても月は雲の上にある。此方とて生身であるから、やがては身を隠す時が来る。形がなくなっても、どこへ行くのでもない。金光大神は永世生き通しである。

おはようございます。令和三年三月十七日をお迎えすることができました。

昨日までは、生と死について、またこの世とあの世、この世というのは顕界、顕界けんがいというのは「顕あらいわれる」という字なんですけれどもね、「顕現けんげんする」の「顕けん」ですね。顕界、この世、目に見える世界と、幽界ゆうがい、幽世かくりよのことですね、あの世とこの世と、この二つのことについてお話をさせていただきます。

天と地というものがあり、生きとし生けるもの、また、万物は天と地とから成り立っているということ。生きているものも、もちろんそうで

すね。天から御霊、地から肉体を分けて頂いて、そして生命活動がある。みたま生命活動がないように思うものであったとしても、目に見える地の部分もあれば、万物を万物たらしめる、天の働きというものが、そこにはありますね。物質の中にも大きな力が当然入ってるわけですね。

考えてみたら、核融合かくゆうごうという言葉がありますけれども、原子力発電にしてもそうですね。物質ではあるんです。人間が働いてるわけではありませんし、動かしてるわけでもないですけども、けれども物質に力を加えるということによって、また大きなエネルギーが出る。ま、それが危険であるかどうかは少し置いといて。これも、そもそも物質というもののの中に、大きなエネルギーというものが当然あるわけですけども。

何も動かない、何もないということではなくって、物質の中にも大きな働きというのが、本来はあるわけですね。

ですんで、死んだらどうなるのか。肉体とたましいが引き分けになる、解^{ほど}ける。そして、たましいは天、肉体は地^ちに戻^{もど}っていくわけですけども。そうすると、天というのが、死者、亡くなった人、御霊様になりますけども、死者の生きる場所になるわけですね。それが、たましいが生きる場所になるんです。そうすると、現実の世界では、私たちはだいたい、地の部分を見て過ごしてる人が多いですから、ですんで、なかなか見えるわけじゃないですし、感じることもしづらい部分がありますね。でも、感じないわけでもない。なぜなら、私たちの中にも天があるわけで

すね。神様から分け御霊様わたたまを頂いておりますから。だから、自分の中にも天がある。

「一寸いっすんの虫にも五分いっぴんのたましい」って言葉を聞いたことあると思うんですよね。一寸というのは三センチ、五分って言ったら一・五センチになりますね、そうすると。ってことはですよ、三センチのうちの一・五センチがたましい。ま、ほんとはこれ、センチとか言ってますけど、なんてことはない、半分はたましいっていうことを言ってるんですね。じゃ、半分は、残り半分はというと、肉体、人体、虫ですから、物質的な、虫の体のことを意味しますよね。これはなんでもそうなんです。私たちの中にも天の部分があります。で、その天の部分というのは、天の属性を

持ってますから、天といつでも繋がる^{つな}ことができてるんですね。

だから、神様の声を聞きたいとか、御霊様の声を聞きたいと思ったら、自分の中の天の部分を常に意識して、その声に耳を傾けておりましたら、聞こえてくるようになるんですね。これはまあ、訓練せんといかんところがあるでしょうし、それをきちんと聞き続けようと思うと、こらなかなが大変だね。かなり修行がいりますし、頭も狂^{くる}うべらいにしんどくなることも多々あるんですけれども。ま、そういうご修行を通らして頂いても、辛抱強くさして頂いていくと、いつでも安定して神様のお声、お知らせが頂けるようになってきます。私なんかもう、三百六十五日、二十四時間、常にこう神様とお話しながら生活してるっていう感じにな

ってきます。でもそうなるには、ほんとにね、なかなかエライことになりますけれど、大変ですけど、いっぱい修行も通らしてもらわんとあきませんしね。ま、それは少し置いて。

人間というのは、生きてる人間も、亡くなった御霊様とでも、常に交流することができるんです。神様とももちろんですけど。で、死ぬということとは、肉体という服を脱ぐんだというぐらいに考えてもらおうと、そして天というのが目に見える全ての世界、今、目に見えるもの全てが地の部分ではありますね。障子しょうしがあったり、電球があったり、時計があったり、ただみ曇たりがあったりとか、外に出たら建物があったり。これ、地の部分ではそうなんですけれども、そこにゼーンぶ天が溶け合ってるという

状況になってきます。だから、目に見えるところ全て、実は天がある。宇宙の果てまでも天がある。地もあれば天もある。全部溶け合ってる。で、そこは時間、空間というものを飛び越えますね。

「金神こんじん」という言葉がありましたね。神様ですね。金神七殺こんじんしちきつ、日柄方角ひがらほうかくっていうふうにして言われてましたね。この日柄、方角を見るといこうことになるんですけど、そもそも日柄というのは、時間を意味しますね。

そして方角、方位ほういというのはこれ、空間を意味するんですね。つまり、日柄方角ということは、時間と空間なんです。ですんで、天地金乃神様てんちかねのかみというの、時間と空間を司つかねる神様ということになってくるんですけれども。

ですんで、天の部分というのは、時間や空間というものは、飛び越えるのが天で、時間と空間というものが限りがあるなら、これが地になるわけです。その両方を司っておられて、人間はその時間と空間の、司る神様のかみじん懐なごみの中で生きている。しかも神様の子ですから、だから本当は誰でも神様の声が聞こえるし、てんちばんぶつ天地万物ごとごとく、神様のお声として、何を触れても、何を見ても、誰でもほんとは聞けるんですよ。

たまみず玉水の初代でしたかね。ある修行生の人に、ちょっと細かいところは忘れましたけど、ぞうきん雑巾きんやったか何やったか何か、あそこで泣いてるっていうような感じのこと仰って。それ捨てられてたんやったかな、ちょっと私細かいところ、あんま覚えてませんけれど、何かまだ使えるのに捨て

られてたんかなあ。そこで、泣いてるっていうふうな感じのことを言われたってことを聞いて。ま、私もよく、同じようなことをしょっちゅう、もうずーっと言ってると思いますけど。「かわいそうや」とか、「もう泣いてるで」とか、「怒ってはるで」とか。物が言うんですよね。で、これ聞こえるんですよ。捨てる時でもそうだし、ですから物に触れる時ひとつとっても、別に人に見える必要はないんですけど、自分の中でやっばりこう、対話がありますよねえ。眼鏡があって、眼鏡拭きで眼鏡を拭く^ふ時でもお話してますし、時にそれが教えてくれることもありますしね。何か話をしてくれる時もあるし。ま、こうして人間っていうのは、万物と話しながら、特に日本人は、生きるということが本来の生き方になっ

てくるわけですね。

ま、そういう生き方から、現代は少し離れた生き方になってきてるわけですけども、信心させて頂くと、この世というものと、あの世という、天と地というものが、ほんとに溶け合っていくんですよね。ですんで、信心すればするほど、いろんなもの、見えないものが見えてくるし、聞こえないものが聞こえてくる。これ、何も肉眼で見るとか、実際は耳で聞くというのではなくて、声なき声で聞こえてくる。自分の中の、天の部分を通じて、いろんなものが見えて、聞こえて、感じていくということになってくる。そういうことになってきます。

また、死者のいう話にしましたら、こちら側はいつもこう、御霊様に

お話をしながら過ごしているように思っても、それだけじゃない。御霊様も常にこちらに声をかけ続けて、どこにいらっしやるって、遠くにいるわけじゃない。もうすぐそこにいる。宇宙の果てにあらうが、どこにあらうが、遠く離れてようが関係ない。もしここに、和太先生、津田和太先生（尼崎教会初代）、ここに^{まつ}お祀りしてるというんで、私が地球の果てにいたとしても、私が話をしたら、目の前に話してるのと同じになっ
てくる。

天は時空を超えますんでね。ですんで、天理は、^{てんり}どことか、こことかっていう、その場所っていうことがないんです。それは地の理^{ちり}で言うって、東京と大阪、物理的に離れてる宇宙の果てと、こことはもう全然、そら

ね、距離がもう何億光年となるんでしょけど、離れている。でも天の部分では、そういうのはないわけですね。どこでも繋がってる、溶け合ってる、一つになってる。そういう感覚になるわけですね。

ですんで、死んだ方とお話をしながら生きていくというのが、また、死んだ方の声を聞きながら、意識しながら生きていく。これが非常に大事になってきます。で、これが教祖様の信仰とか信心の根底にあるわけですね。

また、生きている者ってというのは、生きている間にしっかりと正しい信心をしていかないと、正しく生きるということですね、つまり。それをしていかないと、神様からおとがめを受ける。天で頭を打ったり、苦

しんだ生き方になってしまおうといふことです。

で、それは自分のみならず、ご先祖も子孫にもゼーんぶ伝わっていくことになるわけですね。教祖様は、

この世で生きている間に、人に悪いことをしたり、天地の神様の機感（み心）にかなわないうことをしたりすると、死んでからでも、魂^{たましい}は神様のおとがめを受けるのである。御霊^{みたま}を仏でまつっている者は、このような時、先行き^{みさき}ができないと言い、神道でまつっている者は、御先^{みさき}になると言うのである。

〔理Ⅱ 佐藤光治郎 二八より抜粋〕

「御先^{みさき}」というのは、昨日も少しお話しましたが、変死した人の霊魂^{れいこん}、人に取り憑^ついて引き込んだりすると信じられているというね。柳田國男^{やなぎだくに お}さんによると、この方面でいうところの御先は、死として、人間の非業^{ひごう}の死を遂げて、まつり手がないような、凶魂^{きみうこん}、吉凶の「凶」「に」「魂^{たましい}」と書いて「きょうこん」「って読むんでしょうかね。ちょっと調べたらね、出てこないですよね。

非常に禍々^{まがまが}しい、そういうたましい、苦しんでいる、浮かばれない、助かっている御霊^{みたま}っていうことなんですしょう。災いを呼ぶような、そんな

なにごとで考えられているのかもしれませんね。

それゆえ、この世で悪いことはできない。天地の神様は、
天と地とでじっと見ておられる。地におれば、天からじ
っと見ておられる。天^{てん}知る、地^ち知る、我^{われ}知るとい
う。それが、天地の神様が知っておられるということ
である。天は見通しであるからなあ。

〔同〕

と、仰っておられますね。これは、天というのは、さっきも言いました、

地に全部溶け合ってますんで、天はどこにあるかって言ったら、私の中にありますし、もう目の前にあるし、全部溶け合ってるんです。じゃ、私たちがどこに行こうが、何をしようが、コソコソしようが、みーんな、じーっと神様の目の前でやってることなんですそれね。神様はじーっと目の前で、内からも外からもじーっと見てる中で、悪いことするっちゃ悪いことする。そうすると、全部見える。

でも、することみんな神様にお継りすがして、神様にお断りを申して、神様に従ってさしてもらおうんやったら、これみな、神様が保証して下さっている。神様が保証して下さる上でのことやったら、悪いことはないですわね。なんでもいいようにして下さる。最善のおかげにしようとして

下さる。それは時空を超えるようなことも多々ありますから、だから、すぐにといいことじゃないことも、多いかもしれません。けれども、これが十年、二十年、三十年経った時に、後々になって、「あ、あん時あのようになさして頂いたんが、おかげやった、これもおかげやった」っていうことになってくるわけですね。

「先祖」という存在と、生きてる人間の存在と。先祖の罪を詫^わびて、先祖が浮かばれるってことがありますね。人間は、今生きてる人間が、非常にめぐりで苦しむ、先祖や自分が積んだ罪が巡っている間は、非常にもう、神様も助けてやることがなかなかできない、と。思うようにおかげが授けられないっていうのがありますね。だからお詫^わびをするという

こと。自分の行いだけではなく、

先祖、先祖よりの罪をわびよ。めぐりは、ひなたに氷のご
とくお取り払いはらいくださるぞ。

一理 I 近藤藤守 ニ六一

とありますけれども、お詫わびをさして頂くといいことは、自分もそう
だし、先祖もそうですけれども、巡めぐっている罪をお赦ゆるし頂くといいこと
なるんですね。そうすると、縄なを解ほどいてもらおうようなところがあります。
先祖も浮かばれるし、先祖から自分に巡めぐっていた罪からも解放される。

そうすると、先祖も、自分も、神様も助かるというふうなことになってくるわけですね。

ここまでが、昨日までのおさらいになると思います。もう御霊様の話をだいぶしてきたんで、まあ今日か明日ぐらいには、終わらしてもらいたいとは思ってはおりますけれども。

今日は、生と死という話について、ここまで話をしてきた時に、この御道おみちにわたっての死という、最大の死というのは何かってちょっと考えるのと、やはりこれは教祖様の死なんですよね。これは、ものすごい大きいことでした。当時の方にとったら、生きておられた、肉体があって、お

取次とりじきをして下さったその金光様が、亡くなるということ、いなくなるということ。目の前からもう見えなくなって、話すこと、触れることも何もできなくなってしまふという、死んでしまふっていうことは、そういうことになりますもんね。これは大変なことでしたね。亡くなったらどうなるのか、この御道はどうなるのかってことを、当然みんな考える。また、自分たちはどうなるんか。信心する人はどうなるんやろうか…って、やっぱりみんな考えたんですね。

それに対して教祖様は、お参りをされた方に対して、死ということについて、これまでも見てきましたけども、違う表現をされてるんですね。難波教会の初代の近藤藤守こんどうふさむねという方が、お参りをされた時にですね、

大阪教会の初代白神新一郎先生（しらかみしんいちろう）が亡くなったんですよね。で、一生懸命御用されたけれども、まあ亡くなったんです。もう御用御用、人を助けたいと思うあまりに一生懸命頑張り過ぎて、身を揉み潰（もみつぶ）してしまったという事で、亡くなるということになったわけですね。そんな時に、教祖様が、初代白神先生の死についてのお届けについて、藤守さんに話をしたのが、

みな、死ぬのを嘆（なげ）くけれども、月でも雲（か）が隠（かく）すことがある。

一理Ⅱ

近藤藤守（こんどうふじもり）

五五より抜粋

というふうにして、教えておられるんですよ。

お月様、ありますね。教祖様は「月天四」がってんしって仰ってましたけど、その月、月も当然、雲がある日とない日があります。雲がない時はもう、くつきり見えますね。でも、雲がずーっとこう被かぶざってくると、当然見えなくなりますね。じゃ、月は全く見えなくなって、いなくなったっていうふうになる。でもこれ本当かっていうと、違いますわね。でも小ちいちやい子どもに見せたら、「あ、月がなくなった」ってなるでしょうね。見えないですもんね。でも、大人であれば、雲の先に隠れてるだけで、ちゃんとそこには月はある。でも、雲で隠れてると、雨雲でずーっとこう続いて

るようだど、ずーっと見えな、となりますね。でも同じことにはあな。これ、分かってるわけです。了解してますね。これと同じことやって、これを仰るんですね。

で、教祖様はご自身の死についても、こう仰るんですよね。福嶋儀兵衛ふくしまぎへいの伝えっていろいろと聞いて、「声をひそめて」ってありますね。あまの人には聞かさんようにと思われたんかもしれせん。

金光様が、

声をひそめて、

「月も雲に隠れることがあるう。隠れても月は雲の上に

ある。此方このかたとて生身であるから、やがては身を隠す時が来る。形がなくなっても、どこへ行くのでもない」

一理Ⅱ 福嶋儀兵衛ふくしまぎへい ニニより抜粹」

「どこへ行くのでもない」っていうのは、今日もお伝えしましたね。天というところに行くわけですけど。天というのは、どこにでも全部つな繋がっておりますから。この世のどこにでも、行けるっちゃ行けるわけですよ。

「金光大神こんこうだいじんは永世生き通しである」

【同】

永世えいせいというのは、もう永遠の「永」に世界ですから、世代とも言う、「世」ですよ。世の中の「世」です。永世ですから、もうずっと続く、何代にも続いていく、その世代。ま、永遠の世代っていうことになりま
す。ずっと生き通しであるということですね。

考えてみたら、御霊みたまというのは基本的に生き通しなんです。永世生き通しは、永世生き通しとも言えるぐらいですね。ただ、教祖様の場合は、「生神金光大神様」という、その金光大神とは、その取次の、もう生神と
しての御霊の位ですから、生神金光大神というのはね。「金光大明神」と

か「大権現」^{だいこんげん}とかありましたけど、最終形態としての「生神金光大神」つていう御霊の位にまで上がられた。これ、御霊の働きですね。その御霊というのは、永世生き通しである。

「形のあるなしに心を迷わさず、真^{まこと}一心の信心を立てぬ
け。美しい花を咲かせ、良い実を結ばせてくださる」
と仰せられた。思いがけないお言葉に、思わず身をのり
出して、「それはいつのことでございますか」とお伺いす
ると、

「此方はどこへも知らせないが、真ある者には神様がお

知らせになろう。風の系たこを引くようにな」と仰せられた。

【同】

ペンとこう、分かるようにして下さるんでしようね。これもなんで知らず、知ることができるかって言ったら、亡くなるって、肉体が解ほどけて、たましいと解けて、教祖様のね。教祖様のその肉体と、御みたま霊の働まきが、解ける。御霊だけになる。生神いきがみ金光こんこう大神だいじんという御霊だけになるわけですけども、その時には、天を通じて、それぞれ真まことある人、真まことの信心まじこしてる人、ま、それは言い換えれば、まあ言ったら自分の中の、内なる神様、分わ

みたま
け御霊様の声に、常に耳を傾けて、神様を意識して、声を意識して生きることができてる人。そういう人には当然伝わって、神様が教えて下さる。伝わるであらうっていうことを仰ってるんですね。

ここでも、教祖様は隠れるというふうな表現はあっても、隠れる、月が雲に隠れるということがあっても、月がなくなるってことは何も仰らないですよ。うん、そうなんです。肉体という服を脱ぐだけの話ですから、天というのはどこにでもあります。目に見えるものが全部天ですから、地ではあるけれども、それ全部天なんです。だからどこにでもいらっしやいます。教祖様は今でもいらっしやる。問題はこちらから働きかけるかどうかが大事なことであってね。

佐藤範雄さとうのりおの伝えというところについて、少し読んでみましょう。

常に、

「金光大神（※教祖様）の体や姿に目をつけるな」

と仰せられていたが、ある時、

「（※教祖様が）死んだら、苞つつに入れて流しても焼いても

よいが、

〔理Ⅱ 佐藤範雄さとうのりお ニニより抜粋〕

「苞つつ」っていうのはですね、藁わらとかのこう編んだ、あの敷物みたいな

ものですかね。あれは菰こもか。苞かぶっていろいろのは、藁わらとかで、いろいろ包むものですね。藁わらを編むんで、まあ編むのは結局変わらんですけど、敷くというより、それを包むものですね。食品であるとか、何とか。そういう今で言ったらなんでしょうねえ。まあラップみたいなものですかね。ま、ちょっとそんなのは、昔はなかったですから、何か包むとなった時に裸はだかで持つっていうわけにはいきませんのんで、それを苞かぶにへるんでいたっていうことなんですよね。ですんで、苞かぶに入れて流しても、焼いてもよいが、まあつまり、それはちょっとお粗末過ぎるっていうことなんでしょう。ま、人目もありますしね。

「そうもできないであろうから、神の資格で葬り、ご神灯を先に立てて葬場へ行け。身を葬る時には、大勢の人を呼ぶな。御霊を大切にせよ」
と言われた。

【同】

「これが、佐藤範雄さんに伝えた教祖様のお取次のことですね。『死んだら、苞に入れて流しても焼いてもよいが、そうもできないであろうから、神の資格で葬り、ご神灯を先に立てて葬場へ行け。身を葬る時には、大勢の人を呼ぶな。御霊を大切にせよ』と言われた。」

これ、前に「金光大神の体や姿に目をつけるなって、仰せられていたが」「っていつぶうに、「常に」と仰いますから、よく仰ってたんですよね。で、この金光大神の形、体、姿ということについては、よく私もお話することがありますね。これは、私自身がお取次する時ってというのは、この私の肉体があるから喋ることなげもできるし、口も耳もあるわけですよね。口、耳があるからお取次ができるわけですけど、そんな時の教えの中で、教祖様が、

金光大神こんこうだいじんの姿に目をつけないうちにせよ。金光大神の衣服や形におかげはない。

一理Ⅱ 仁科松太郎 一より抜粋

肉体も含めてですよ。いよいよよんと、そこからおかげが出るわけじゃないってことなんです。

金光大神の御霊みたまの働きにおかげがあるのである。

〔同〕

教祖様も小天地こてんちですから、肉体、地の部分と、分け御霊みたま様、天の部分が
ある。金光大神こんこうだいじんの御霊みたまの働き、つまり天の働きにおかげがある、というこ

とを仰ってるんですね。これ、私でもそうですね。とは言っても、肉体がないと話になりません。お取次とりつぎは、この世でお取次しようと思うと、だからやっぱり、これも大事なんです。

ただ肉体さえあったら、人が助けられるかということ、そういうわけじゃない。神の働きを現せるかっていうと、そうじゃない。神徳しんとくは頂けるかっていうと、そうでもない。肉体があっても、それだけじゃ駄目だめなんですよね。じゃ、たましいを磨みがいて、本心の玉を磨いて、光を放して、放って、強い光が放てる、これが大事なわけで、それは御霊の働きになるということですね。こう仰ってる。

これ、佐藤範雄さとうのりおさん、また違うところで、教祖様のことですけどね、

此方このかた（※教祖様）死なば、屍しかばねは苞つとにして川に流すとなりと土に埋うめるとなりと、勝手にせよ。人の死にたる体は空なり、不浄ふじょうなり。しかし、親を川に流したと言うては、世間もかれこれ言うであらう。菰こもに巻いてでも

一理 I 佐藤範雄さとうのりお 二十より抜粹一

菰こもって言うのは、今で言うたら藁わらみたいなもんですけど。イネ科の植物で、それをこう粗く編んだ敷物ですな。

菰こもに巻まいてでも土に埋めておけば、事は足たる。御みたま霊たまのま
つりは大切にせよ。

【同】

と仰おほってるんですね。

教祖様、「自分が死んだら、私が死んだら、自分の死体は、苞つとに何かち
よっとくるんでやな、川にでも流すなり、土でも埋うめとってくれたら、
もうそれでええわ。もう勝手にしといて。ま、人間が死んでしまった体
は、もう空っぽやからな。って言うか、もう腐くってくるし、もうえらいこ
っちゃやで。きちやないで。せやけどな、まあ親おや、「親おやっていうのは、肉

親の親だけじゃなくって、たましいの親っていう意味も既にありますから、だから佐藤範雄先生にとっては、親になってるわけですね。だから、
「親を川に流した言ったら、まあそろそろ、世間もあれこれ言うやろうなあ」と。
「もう、ちゃんとお前、なんでそんなこと、お祭りもせんともうそんな勝手なことしたんや」って、そろそろい周りにも言われるでしようねえ。世間はあれこれ言うでしょう。だから、「でも世間もあれこれ言うやろうから、もうワシはもうこの自分が死んだら、もう苞つつにして、もう川に流すでも、土に埋めるでも勝手にしてくれと思っとるけれど、まあ君たちの立場になったら、そうはいかんわな」と。「せやから、まあ菰こもにでも巻いて、土掘って、ほんでそこに埋めとってくれ」と。「もうそれで十

分や。事足る」と。でも、「御霊みたまのまつりは大切にせよ」って。

これ、どこが中心になってるかっていうのが、よく分かりますね。生きてる間は、肉体は大事なんですよ。でないしなと喋しゃべれませんか、もう、ものすごく大事なんです。肉体があるから話せるし、肉体があるから皆、見ることができし、「ま的ていなしの信心しん」って言っても、言っても的ていがあつた方がし易いのは確かで、生きてる人間がいて、お取次とりつぎ頂いて、ご祈念ごきねんして下さって、神様のご慈愛じあいっていうのを、身をもって体験して、自分に注いで下さる。ご理解下さる。これが、何よりも大きなお取次とりつぎでね。で、こんなありがたいことはないです。

でも、死ぬとなってきたら、もう死んだら、これもう使い道ありません

んからね。もう腐るだけですから。だからもう空っぽや、と。体は。だからもう、どないしてくれても構わんねんや、と。だって、がら抜け殻や。もうバツサリされてますけど。大事なのは体やなくて、かんじんかなめ肝心要は御霊やから、それは大事にしなさいよっていうことを、こう仰ってるんですね。で、御霊になるってというのは、もうここ数日お話してるから分かると思う。じゃ教祖様、どこに行ったかって言うのと、どこにも行ってない。ただ天に行ってるだけでしょ。じゃ天ってどこですか。今、皆さんが見えてるとこ全部、天なわけでしょ。見える形は地ですけども、でもそこに全部天が重なって溶け合ってるわけですから、ここが大事なところですね。

先ほどの、福嶋儀兵衛ふくしまぎへいの伝えでね、声をひそめて仰って、「月も雲に隠れるということがある。」で、自分も生身の人間やから、やがては身を隠すことがある。「身を隠す」という表現をしていますね。つまりこう、肉体というのはなくなっても、自分の御霊というのは生き通じである。でも目には見えないだろう、と。それはちょうど、あったとしても見えないっていうことは、天に行ってますから、ちょうど月があっても雲に隠れるであろう。同じようなもんや。でも、どこに行くわけでもない、と。「金光大神こんこうだいじんは、永世えいせい生き通じである」といついつに仰る。

教祖様は、ここでまた大事なご理解が他にあるんですけど、

金光大神こんこうだいじんは形がじゃまになって、よそへ出ることができない。形がなくなってからは、来てくれと言う所へ、すぐに行ってやる。

一理Ⅱ 難波なんばなみ九一

っていう教えがあるんですね。

こんこうだいじん

すがたかたち

金光大神は形、形というのは姿形すがたかたちのことなんです。肉体のことなんですけども、金光大神はこの形が邪魔になって、よそへ出ることができない。形がなくなってからは、姿形がなくなって、死んでね、なったら、来てくれとさういふに、すぐに行つてやる。じゃ、「すぐ」って

書いてますね。これ本当なんです。なんでかって言ったら、さっきも言った、天にいらっしやいますでしょう。天やったら、時間と空間を、どないなりますか？問題です。そうですね。時空を超えますから、時空を超えるってことは、もうたとえ何百年経とうと、今、教祖様が亡くなってもう百何十年も経ってますけど、でも皆さんが、「教祖様」「金光様」って言うたら、それでパッといらっしやるわけですよ。でも大事なところはね、「来てくれ」ということです。「来てくれ」と言わなかったら、パッととは行けない。なんでか。これ、あの世とこの世の関わり合いですから。

先日から話してますけれど、日本人の死というものについて、当時か

ら信じられてるやうなところについて、柳田國男やなぎたにくにおっていうね、民俗学者の方が、
まとめておられましたけれども、そんな中で、死者というのは、こう生き
てる人間は、亡くなったことを思っていますよ、こちらから声をかけたり、
働き合う、働きかけるといふことはあるように思うけれども、心の中に
想ったりね。でも、それだけじゃないと。御霊みたま様の方も、人間に対して、
常に働きかけるもんだとして信じられていた。これが本当なんですよね。
で、「御霊様から、そんな声かけてくるってあるんや」って思うようにな
ったんは、明治維新めいじいしん以降の、近代的な、西洋思想のそいう感覚というの
が入ってきて、で、私たちもそんな中で生きてますんで、だんだん、そんな
もんだと思ひ込んでる節ふしがありますけれども、元々は違ちがうんですよね。

ですんで、この世やあの世っていうのも全部一緒、非常に近いんですよ。遠くに離れていくってことがない。

で、仏教っていうのはね、完全に遠くに行っちゃうんです。極樂浄土「ゴクラクじょうど」っていうふうになりますけどね。もう億も万も、仏道というところを超えて、そして極樂浄土っていうふうに行く。で、もうそこに行っちゃったら、行ってしまったになりますから。でも遠いですよね、限りなく。

それに対して、日本人の、元々の死というものの観念というのは、もうほんとに肉体という服を脱ぐというくらいです。ですから、いつでも生きて、いつでも話が出来るし、呼べば来るし。で、大事な時にはお祭り「まつり」する。お正月であったり、お盆であったり、春秋のお祭りとか、そういう

う時にはもう、お祭りができる。みんなで祝うということになってくる。それがまあ、普通だったんですよ。

でも、これもこちらが働きかけないと、向こうからだけでは働きようがないというところがありますね。だからこれ、来てくれというふうに言うところには、皆さんが教祖様に対して「来てくれ」って、「金光様、教祖様、お願いします」っていうふうにして働きかけたら、そうすると教祖様も、来てやることができる。来てやることのできるっていうのは、教祖様のお徳を少しでも、それにこちらとしては触れることができる。そのお徳で、働いてやることのできる。天を通じて地にあいつわ顕れて来ますから、いろんなものでそれだけの神徳を積んでこまひ下さいましたからねえ。

こへ行こうが関係ないから、呼んだらすぐに、その場にいるっていうふうになってる。なんでできるかって言ったら、天にいらっしやるからね。だからそんなのは、なんてことないわけです。形があるから、生きてる間はお取次ができるし、でも身体があると、ま、ほんとに走ってそこに行ってやっていうことは、もちろんできませんよね。

東京におる人が「助けて」って言われて、じゃ、私、新幹線に乗ってそこまで……って言って、こんなに時間がかかることはないですわね。まさかの時には全然間に合わんですよ。でも、御霊になって、肉体がなかったら、言われた瞬間にもうその場にいますから。心が向いた瞬間、もうその場にいますから。そして働き合いがそこに生まれると、私やったら、

私が積んだ徳であったりとか、そういったものを使うて頂くことができる。氏子にとつたら、そのお徳を少し頂戴たいていすることができ。とんだけ頂戴できるかは、その人とこちら側とのパイプの太さ次第になってきますけど、常日頃からお継つがりしてたら、パイプという繋つながりか太いんですから、太くなればなるほど、そのお徳というものは自分にも触れることができる。その恩恵おんけいに預あづかることが出来るわけです。これ、神様とのパイプでもそう。金光大神様というパイプもそうですけれどもね。そうなつてくるんですよ。

ま、このようにして、教祖様の死ということについても、死と言つても、肉体という死があつても、御霊は生き通しで、さらには肉体がある

からできる御用がたくさんあったけれども、取次はそう。でも、いつかは生身やから、亡くなる。でも、亡くなったら亡くなったで、いろいろ御用ができるんや、と。来てくれというところにすぐ行ってやることができる。これ、何よりもありがたいことやと、教祖様、仰ってるわけですね。ま、それで「亡くなって、教祖様が亡くなって、みんな悲しかったと思うんですよ、やっぱり。まあそれは言っても、目に見えなくなって、触れることもできなくなったって、そら寂しいひびでしようねえ。

でも、「どこに行くわけでもない」と。「月が雲に隠れるだけやし、どこにも行かないし、来てくれて言ったら、もうすぐにも行ってやる」って言って頂いて、安心なさったでしようね。で、いつも、つきまとうて

下さると思うでしょうねえ。神様、金光大神様とお縋りしながら、皆さんご信心されたと思います。そして教祖様も、それで喜んで御用して下さったやろうと思います。

これがまあ、この御道おみちにとつての、まあもう何より、御道、金光教というこの御道にとつての、一番のね、大きな死というものは、やっぱり教祖様の死になってきます。亡くなる時に、また金光大神祭日こうこうだいじんまつひというふうにしてね、十月十日にお祭りを仕えておられたんですけど、まさにその日に亡くなったということも大きな意味があるわけですけども。それはまたいつか、お話をさしてもらおうことにして、この生と死ということ

について、ずいぶんお話をさして頂いてきましたので、最後は教祖様のお話をさしてもらいました。

もうここで終わってもいいんですけどね。あと最後です、せつかくですから、み教えだけでも紹介しましょうかね。

新たに分家をする、十人が九人まで、うちには先祖がないと言うが、大きな間違まちがいじゃ。みな先祖というものがある。先祖様と言うて家々にまつらねばならぬ。

一理Ⅲ 御理解拾遺 三七一

という教えがありますね。

でも神様、「もうここまですしとけ」と仰るまで、ここまですして、明日続き、あまり深くじっくりというよりは、さらっとでもいいんで、聞いたことがないみ教えもあるかもしれないから、「ああ、なるほど、そういうご理解があるんやなあ。ああ、こういうみ教えを残して下さいってるやな」っていうこと、またご紹介しましょ。

で、覚えておいて下さい。それがまた、日々の信心生活の中で実践していったら、神様のおかげを頂くことができるし、ご先祖を大事にしたら、ご先祖も浮かばれるし、罪も取り払って頂けるし、自分も、生きてる者も立ち行く。自分自身の生き方、子孫への伝え方も、全部ある程度決

まっていますんでね。まあその辺のことを、少しお話をさせて頂きますよ。今日はここまでにします。

今日も一日、神様から新しい命を頂きました。まっさらな一日を頂いております。神様はおかげを授けよう授けようとして下さっておりますから、そのおかげを身一杯に受けるように、この身、この心を神様に向けて、いつでもどこでも何をしても、「神様、こみくだいじん金光大神様」っておすが継りしながら過ごさしてもらって下さい。「神様、神様」で結構なんですけれども、まあでも、その一本よりも、できたら「神様、金光大神様」っていうふうにしてパイプを使った方が、そっちの方が得やと思っております。

「おかげは受け勝ち、守りは受け得」って言いますけどね。「神様、神様」でもいいんです。それでもおかげ頂けます。むしろ、それが本来です。でも、金光大神があって神が世に出て、金光大神っていう橋があるから、おかげの通り道というのがあります。

そのために、私も誰よりも修行させて頂いて、神様とのパイプを太くしておこうと。で、それ何のためか言って、私のためじゃないんで。別に私のためだったら、もう十分おかげ頂いてますんで。こらまあ皆さんがおかげを頂くために、そのために修行せんといかんと思って、できるだけパイプを太くしておかんといかんと思って。その方が、皆さんがおかげ頂かれますんでね。そのために、あらぬ行も含めてさせて頂いて、

少しずつこうパイプを太くする。ですんで、「神様」ってお縋りしてもいいんですけど、自分と神様とのパイプが余程自信があったら、それでいいんです。ま、自信があったらってわけじゃない。ま、おかげは神様からしか出ないですけどね。

でも、自分と神様とのパイプっていうのが、やっぱり太さっていうのが、当然皆ありますんで。今の自分と十年後の自分とでも、パイプの太さは違うでしょうね。ですんで、そのパイプの太さでしか、おかげは通り道がありませんので、その点、金光大神様っていう、その神様から差し向けて頂いている、自分のために差し向けて下さっているその太いパイプですね。それはまあ、使えるものは使った方がいいとは思いますが。

その方が得ですしね。そのために神様差し向けてるわけで、皆さんと私が出会ったのも、そのためでしょうから、だからこの金光大神というそのパイプを使う^こて、通すところを通してもらったら、その手続きをもったら、なんでもおかげは頂きやすくなってきます。

ですんで、でもおかげは神様からで、私から出ることはありません。私を通じて神様に拜んでもろうたら、一番やと思う。だから、「神様、金光大神様」って、ワンセットにするのが、私はお勧めです。「神様」って言っても、おかげは頂けます。でもそうすると、自分のパイプだけになる。で、「金光大神様」って言って、まあそれでも、おかげは下さるんです。けれども、私は「神様、金光大神様」っていうのが、これが私のお

勧めです。で、それが一番やと思ってます。だから、「神様、金光大神様」
って言いながらお継りして、どうぞこれまで頂いた教え、ご理解を心に
かけながら、どうぞ心を神様に向けて信心して下さい。
どうぞおかげを頂いて下さい。よくお参りでした。

（了）
（ ）



津田昇平教話 第七六話

令和三年三月十七日 朝の教話

令和四年五月四日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七一五
